

HIKAKU BUNGA KU

Journal of Comparative Literature

VOLUME LVII

Thérèse Raquin et la théorie picturale du post-réalisme Soichiro JITTANI

Mokutarō Kinoshita's Acceptance of Édouard Manet: A Study Hiroko ONO

Natsume Sōseki's Affective Theory of Literature Compared to C. T. Winchester's
Some Principles of Literary Criticism and Leo Tolstoy's *What is Art?*
..... Toyokazu KIDOURA

Importing the Canon: *The Harvard Classics* and the *Enpon Zenshū*
..... Shunichiro AKIKUSA

Japan's Acceptance of "Black Literature" and Literary Movements in the 1950s and 1960s:
Kijima Hajime's Post-War Poetry, Folk, and Jazz Kiriko NISHIDA

Takeda Rintarō and Orientalism:
Focusing on the Representation of the "Ideology of Sameness"
in *Jawa Sarasa* (1944)..... Syahrur Marta DWISUSILO

Lilies in *Sorekara (And Then)* by Natsume Sōseki: In Relation to *Dora Thorne*
and *Konjiki Yasha (The Golden Demon)*..... Yumiko MASUDA

Japan
Comparative Literature
Association
2 0 1 4

Takeda Rintarō and Orientalism: Focusing on the Representation of the “Ideology of Sameness” in *Jawa Sarasa* (1944)

DWISUSILO Syahrur Marta

In 1942, proletarian writer, Takeda Rintarō, was sent from Japan to the Dutch East-Indies (Indonesia) as part of the *Sendenbu* (propaganda squad), where he led the literature section in the *Keimin Bunka Shidōshō* (cultural center) in Jakarta. *Jawa sarasa* documents Takeda Rintarō's activities and cultural experiences in Java, Indonesia, after he returned to Japan in 1944.

Most Japanese literature and cultural writings about *Nanyō* or *Nanpō* (“South Islands” - South Asia and the Pacific, including Indonesia) from this era reference the concept of Imperialism in Asia. In the pre-war period, stereotypes such as *dojin* (local primitive) and *tōmin* (islander) defined South Island people as being lesser than or “other” than the Japanese people. Japanese literary depictions of tropical Eden's and exotic “uncivilized people” reflect similar perceptions and writings by Western authors towards Asia in the 19th century.

This paper explores Takeda Rintarō's perspectives of “otherness” in pre-war discourses about Indonesia. Through the influence of “The Greater East Asia Co-Prosperty Sphere” propaganda concept, the ideology of “sameness” was becoming a hegemonic cultural idea in Takeda's writings about Indonesia. Conversely, however, Takeda's depiction of the double-occupation of Java, with the political rule of Holland and economic domination of daily life by Chinese immigrants, implied criticism of Japan's administrative policies regarding economic exploitation in Java. Takeda's criticisms of Japanese policy are bedded in his emotion for the nature, culture and people of Indonesia.

一はじめに

武田麟太郎は一九四二（昭和十七）年から一九四四（昭和十九）年にかけて、陸軍徴用令により宣伝官撫部隊としてインドネシア（当時の蘭印）へ派遣され、現地の「啓民文化指導所」の文学部委員長となった。帰国後、インドネシアでの従軍体験を活かし、『ジャワ更紗』（筑摩書房、昭和十九年十二月十日）を発表している。武田麟太郎が宣伝官撫部隊の中で最もインドネシアへの愛着と同情を示した人物であることは、数多くの先行研究で論じられている。研究の多くは、周りの人の証言と回想に基づき、ジャワにおける武田麟太郎の実際の活動を確認したものである。神谷忠孝は、「自分たちのインドネシアに対する広い無限の愛情、彼らの日本人への深い無限の信頼は、美しいジャワ島では、まことに固く結ばれ、着々大東亜文化共栄圏の理想はすすんでゐるのである」という『ジャワ更紗』の

ジャワ時代の武田麟太郎作品は、「日本と被支配国との同一性を強調する言論のほう」が、むしろ植民地支配の正当性を補強する論理として機能した⁽¹⁾という点で、オリエンタリズムの変容と見なすことができる。これまでの東南アジアにおける日本の西洋的オリエンタリズムに関しては、⁽²⁾帝国主義的な言説としての南進論との関係を視野に入れながら、明治初期から昭和にかけての南洋観および南方観が論じられてきた。川村濤が指摘するように、島田啓三の『冒險タラシ吉』（昭和八十四年）に表現された熱帯、黒ん坊、未開人、野蛮人、などのイメージと同様、金子光晴の『アムステルダム』（昭和十五年）において⁽³⁾も、インドネシア人が植民地の「土人」として描かれている。つまり、偏見に基づく他者の認識が見られるのである。しかし、昭和十六年十二月八日の太平洋戦争勃発以降、インドネシアに関わる帝国主義の言説は南進論から「大東亜共栄圏」へと展開し、インドネシア人は「同じアジアの一部と見なされるようになった。一方、「同じアジア人」という同一性の言説は、本来、漢字圏、儒教圏といった、文化的にも思想的にも共通する国々⁽⁴⁾にのみ適用できる考え方である。長い歴史の中で、日本人の意識に既にあった西洋（オクシデント）と対照的な概念としての東洋（オリエンツ）の理念化である。しかし、インドネシアを含む「南方」が、「同じアジア」の枠組みに入れられた理由は、

武田麟太郎の日本的オリエンタリズム — 『ジャワ更紗』における同一性論を中心に —

シヤルル アルタ デュイヌシロ

文章を引用し、武田麟太郎がインドネシアの独立を真に願っていたと指摘している⁽⁵⁾。

一方、河西克祐は「大東亜共栄圏」言説との関わりに注目する。武田麟太郎は『ジャワ更紗』でオランダを「毛唐」と呼んでおり、インドネシアへの肯定的な姿勢は西洋人への偏見を前提としており、「八紘一宇」と「大東亜」を出現させるために西洋の排除が行われていると指摘した⁽⁶⁾。さらに、武田のインドネシア評価が、西洋対東洋という二項対立の中に置かれる場合のみ肯定的であるという分析も加えている。武田麟太郎は、北原武夫との比較においては、差別的表現がないと指摘されている。しかし、「大東亜共栄圏」という偽装のスロウガンを中心に、から信じたため、武田麟太郎の願ったインドネシアの独立は、スカルノ／ハッタが願ったインドネシア独立とは異なり、日本帝国下の「独立」であった。このように、ジャワ徴用時の武田麟太郎に対する評価は、わかれているのが現状である。

地域文化的興味からというよりは、資源確保のためだった。しかも、「大東亜共栄圏」の概念が成立してから、さほど長い時間を経ていたわけでもなかった⁽⁶⁾。

このような言説の背景が武田麟太郎のインドネシアに関する語り⁽⁷⁾に如何なる形をもたらしたのか、先行研究においては十分に論じられていない。本論では、インドネシアにおける日本のオリエンタリズムを再考する一つの試みとして、武田麟太郎の『大東亜共栄圏』言説の捉え方について明らかにしたい。なお本論文では、引用にあたり旧字を新字に改めている。

二 「なつかしさ」の連想

ジャワを描く武田麟太郎の作品においては、「なつかしさ」を喚起する言葉がしばしば用いられている。ジャワ島巡回中、武田はジャカルタから東に一四七キロ離れたバンドンという涼しい高原の町を訪れた。昭和十七年四月十四日付『東京朝日新聞』に掲載された「なつかしい風物」において、バンドンについての感想が次のように表現されている。

いつか東京こちらの距離を忘れてしまつて昔からずっと住みなれてゐるやうな錯覚を起すのだ。誰でもいふやうに椰子の木さえへなければ、日本と少しも変らぬ景観の故でもあら

う。暗闇を縫って青白く螢がとんでゐる。ああ、こはたし

かに一度来たことがあるといふ感じがして、全くはじめて踏
んだ土地とは思はれない。自分の血のなかに、ここをよく
知つてゐるものが流れてゐるのを自覚するのだ。⁽¹¹⁾

バンドンは、武田に日本を思い起こさせたが、しかし、そ
の表現の契機となつたのは人文化ではなく、「暗闇を縫つて
青白く螢がとんでゐる」インドネシアの自然であつた。武田が

ジャワの自然を題材にしたのは、日本を連想させる自然の風景
があつたからかもしれない。このような文章の原点はジャワ上
陸時の経験と密接にかわつてゐる。昭和十七年六月二十三日

付『東京朝日新聞』に連載された「ジャハのフチャン」シリ
エの「敵前上陸」では、フチャンを通して、インドネシアの
知印象が次のように記述されている。

海上のあの激しさに引きかへ、敵兵のいち早く潰走した陸は
何といふ静かさであつたらう。何十日ぶりかで踏む土のなつ
かしきにも増してぐつと胸に迫つて来たのは日本と同じ楯の
花のほびでした。⁽⁹⁾ (傍線は引用者による)

ジャワ上陸時の経験は、武田麟太郎らインドネシアに派遣さ

きましい叫びであるやうな錯覚を起す。なつかしい風の音で
ある。⁽⁹⁾ (傍線は引用者による)

このようなインドネシアの自然は、「眼をつぶつて、それを
耳だけで聞いてゐる」武田の想像上のものように見えるかも
しれない。しかし、武田はジャワ島に上陸する前にインドネシ

アと接点を持つておらず、これはジャワ島上陸後の経験に伴う
感情に還元する他はない。武田が、当時のインドネシアについ
ての一般的な言論からかなり離れており、現地における自分の
実感を重視していたことは、『ジャワ更紗』の次のような回想

からもうかがわれる。

前述のやうな何か紛本あつて、感動もなく机上で作製された
書物よりは、あわだたい通りすがりの旅行記なぞに、却つ
て面白いのがあつた。自分たちは二年足らずしかゐなかつた
のだが、その間に外界に対する好奇心や感覚が麻痺したと云
ふか、別にとり立て珍しくも刺激的にも感じなくなつた事
相が、新鮮な印象で掴まれ、要領よく描写されてゐることが
あつて、更めて教へられる想ひがしたりする。そして、案外
正しい場合も多い。⁽¹¹⁾

れた南方徴用作家にとっては重要な要素である。例えば、阿部

知二は、昭和十七年三月一日付「ジャワ・パル」誌所収の「ジ
ヤワ上陸」で、武田麟太郎と同じような経験を語つてゐる。阿
部知二は、乗つていた戦艦がオランダの攻撃により沈没する
という危機一髪の瞬間に遭遇した。そのため、ジャワ島を舞

台にした回想作品では、「死」に触られている。これは、戦
後に発表された『死の花』(昭和二十一年)と『二つの死』(昭和
二十八年)の各作品のタイトルからも明らかである。これに
対し、昭和十七年三月一日にバンタム湾 (Teluk Bantam) に

日本陸軍と共に上陸した武田は、オランダの攻撃を受けていた
が、ジャワ海の激戦が早く収まつたため、上陸の際にオランダ
の抵抗がなかつた。そのため、ジャワの印象は、「静か」な自
然というものであつた。さらに、順調にハタヴィア(ジャカル
タ)に移動した武田には「本と同じ橋の花のほび」が迫り、

「何十日ぶりかで踏む土のなつかしさ」とあるように、内地へ
の思いを喚起させた。このジャワ上陸の経験に伴う故郷の懐か
しさは、「上陸半歳の所感」(昭和十九年九月十九日付『読売報
知新聞』)においても繰り返し返して表現されている。

けふもまた夕暮れ近く、高い空で強い風が鳴り始めた。眼を
つぶつて、それを耳だけで聞いてゐると、内地の木枯しのす

このような現場主義的な感覚に依存する武田にとって、イン
ドネシアの自然に伴う「なつかしさ」は、過去の美化といつた
ロマン的な妄想、あるいは憧れの異国への賞美から生み出され
た西洋オリエンタリズム的な感情というより、眼前の風景に対
する実感であつたと言えよう。武田はインドネシア語をおぼ

え、帰国後も熱心にインドネシアについての知識を求めた。こ
れに関して、『ジャワ更紗』所収のインドネシア人文学者ア
ルミン・パネへの手紙で語られている。

をかしな話だが、自分はジャカルタにゐた当時よりも、イン
ドネシア語が上手になりましたよ。色々と学習に更宜のあつ
た現地では不勉強であつて、戻つてから、却つて本格的に熱心
にやりはじめたのだから、滑稽でせう。だが、これもジャワ
への郷愁がさせるわざでした。実際、和やかな環境と厚い人
情の、美しい島の生活を遠く想ふたびに、郷愁と形容してい
いやうな感情を禁し得ないのです。⁽¹²⁾

しかし、ジャワ時代の武田麟太郎作品は、無論自然だけでは
なく、人間と文化も対象にしている。昭和十七年七月の『文芸』
誌に掲載した「妻への手紙」では、次のように記述されている。

の拡大であるが、この『ジャワ更紗』の創作段階では、武田は本と一体視され内部化された東アジアの国々としての『東亜』ないかと考えられる。なぜなら、『大東亜』の概念は、既に日なり、『大東亜』というスロウ・カンへの違和感も抱いたからでは、概念について武田には皮肉としか理解できなかつた部分があだという混乱にも陥っている。その理由としては、『大東亜』本人に対する好意を提示し、一体感の達成を強調する狙いがある。武田の頭にある単独の会話であり、自分に問いかけた問題だつたのではないか。一見すると、この会話はインドネシア人の日きず、武田による架空の会話である可能性も高い。この語りはこのような会話が実際に行われたかどうかについては確認できず、武田による架空の会話である可能性も高い。この語りは武田の頭にある単独の会話であり、自分に問いかけた問題だつたのではないか。一見すると、この会話はインドネシア人の日訂正されたからであらう。おぼえてゐないのはいのことだ。⁽¹⁷⁾

はないでせうか、民族が同じか、ちがふかが一切であるとする少年の、単純な素朴な考へ方は賞むべきかな。ここにはあらゆる複雑な、煩瑣な認識以上のものがあるやうだ。それが歴史の上で決定する大きな意味を含んでゐる。(中略)何かそんな事実もあつたのかとも思ふが、今は記憶がない。直ちに訂正されたからであらう。おぼえてゐないのはいのことだ。⁽¹⁷⁾

「同じアジア」を宣伝する任務の中にあつた武田麟太郎の、「人間も日本人とよく似てゐるし、言葉にも共通点があります」「人間も日本人とよく似てゐるし、言葉にも共通点があります」という同一性を強調した表現を見ると、人間や言葉が似ているのは、「同じアジア」に属する日本人とインドネシア人のことである。その対比の客体はオランダ人をはじめとする西洋人であつた。しかし、インドネシアが武田麟太郎にどのようなアジア人として意識されたのかは、非常に興味深い問題であり、これは「大東亜共栄圏」思想に対する捉え方と密接と関係してゐると思われる。それを明らかにするために、『ジャワ更紗』における他者の意識を見ておこう。

三 他者の分裂

「オランダ人をどう思ふ」(中略)すると、相手は、「民族がちがふんだもの、私たち、インドネシアと、……」「一ちや、日本人とは同じ民族なのか知ら」「ええ、さうです」「黒い眼を見張つて云ふ。「ふん」と、自分は一見意地悪い笑ひを浮べて、「本当にさう思つてゐるのかね、見たところ、ほら、君と僕とだつて、随分ちがふぢやないか」彼もまたなせか少し照れた顔つきになつたが、決してだるるかなかつた。「ええ、でも、すうとと大昔は同じだつたので

「オランダ人をどう思ふ」(中略)すると、相手は、「民族がちがふんだもの、私たち、インドネシアと、……」「一ちや、日本人とは同じ民族なのか知ら」「ええ、さうです」「黒い眼を見張つて云ふ。「ふん」と、自分は一見意地悪い笑ひを浮べて、「本当にさう思つてゐるのかね、見たところ、ほら、君と僕とだつて、随分ちがふぢやないか」彼もまたなせか少し照れた顔つきになつたが、決してだるるかなかつた。「ええ、でも、すうとと大昔は同じだつたので

「オランダ人をどう思ふ」(中略)すると、相手は、「民族がちがふんだもの、私たち、インドネシアと、……」「一ちや、日本人とは同じ民族なのか知ら」「ええ、さうです」「黒い眼を見張つて云ふ。「ふん」と、自分は一見意地悪い笑ひを浮べて、「本当にさう思つてゐるのかね、見たところ、ほら、君と僕とだつて、随分ちがふぢやないか」彼もまたなせか少し照れた顔つきになつたが、決してだるるかなかつた。「ええ、でも、すうとと大昔は同じだつたので

「オランダ人をどう思ふ」(中略)すると、相手は、「民族がちがふんだもの、私たち、インドネシアと、……」「一ちや、日本人とは同じ民族なのか知ら」「ええ、さうです」「黒い眼を見張つて云ふ。「ふん」と、自分は一見意地悪い笑ひを浮べて、「本当にさう思つてゐるのかね、見たところ、ほら、君と僕とだつて、随分ちがふぢやないか」彼もまたなせか少し照れた顔つきになつたが、決してだるるかなかつた。「ええ、でも、すうとと大昔は同じだつたので

る「支那人」への偏見に満ちた言論を行う。つまり、「ジャワ更紗」における他者は西洋のみではなく、「支那」というもう一つの他者も存在していたのである。インドネシア人の自由のために、華僑がオランダと並び排除すべき他者であるとされたことは、上記の引用からも明らかであろう。しかしながら、なぜ「一つのアジア」の言説を強調する中で、排除すべきもう一つの他者を出現させる必要があったのだろうか。それに関し、『ジャワ更紗』が作り出す華僑のイメージを確認しておこう。

これまでの華僑に関する表現は、金利子、南売などの言葉とかわつてゐる。「支那」は経済を連想させ、権力との関係において、インドネシア人の支配者として出現している。つまり、「ジャワ更紗」においては、思想の支配者としての「西洋人」「毛唐人」に対し、経済的な支配者は「支那人」とされてゐる。このような経済的イメージと他者としての「支那」の出現は、ある狭い意味を含んでいた。それは、武田が行う批判を可能にする仕掛けであり、当時の母国の政策に対する批判的な考え方を表現する装置であった。前述したように、内地（日本）によるインドネシア認識のあり方への批判は、他者として出た西洋への批判でもあった。換言すれば、西洋を他者として出た現さることにより、武田の思想的文化的批判が行われたので

華僑系であったことが、大谷晃一の『評伝武田麟太郎』(河出書房新社、一九九七年、三四四頁に記されている。

武田は、インドネシアを天国と言ひ、華僑を一つのジャワの美としてゐるが、他方では、華僑に対する偏見も表明してゐる。サイトのオリエンタリズム論における他者の認識においては、帝国主義と植民地化のもとの西洋の偏見と、異国として中東やアジアに対するエキゾチックな奇妙な絡み合いの感情が両立している、とされる。これに対し西原大輔は、日本の場合、他者としての中国認識においては、近代化に遅れたアジアの国々に対する偏見が過去の美への憧れとしての「支那趣味」と結びついたり指摘してゐる。このようなオリエンタリズムの要素は、昭和時代にも引き継がれ、インドネシアにおける武田麟太郎の他者認識にも残つてゐる。『ジャワ更紗』におけるインドネシア人の性格描写には、それが明確に示されてゐる。軽蔑はいののだが、そのために、支那人の「高利貸」には随分苦しめられてゐる。商業と云ふことは、下種な職業

右の引用に関しては、武田が「大東亜共栄圏」の「大思想」を本心から信じていたために、資源確保のみを語ることへの批判を行うことができた指摘することもできる。しかし、武田の批判は資源確保に対する批判にとどまらず、その対象は「事業家」「資本家」のやり方に向かった。すなわち、「労働の果実を搾取し、あまつさへ、貧困に乗じ」る華僑への批判と同じように、「強盗的」経済のあり方に対する批判である。このような用語の選択から見ると、左翼的な印象が強く、社会主義思想の

と見なしてゐるから、経済的に華僑にすつかり支配されて了つた。商店は支那人の経営でなければ、アラブ人、印度人などが主人である。(中略) それであつて、その豚を食ひ、生産に直接あつからないうで物の交換過程に利潤を得て、肥りに肥つて行く異教徒を、不名誉な唾棄すべき存在として、暗々裡に非常な反感を持つてゐる。労働の果実を搾取し、あまつさへ、貧困に乗じて不当な日歩で利子を取り立てる華僑。(傍線は引用者による)

「野暮の精神はない」インドネシア人の特徴は、江戸っ子の性格と重なり合はされてゐる一方、ここでは「支那人」と対比されてゐる。注目したいのは「支那人」「華僑」との対比の出現である。「支那」、アラブ、印度はアジアの国々の象徴として出現しているが、インドネシアは被害者としてアジア以外で出現しているように描かれてゐる。この文章はインドネシア解放をテーマにする狙いがあつたが、武田はここで「支那」とインドネシア人との差異を見出しているのである。「支那」の出現は別の意味もたらず。「支那」の登場により、もう一人の他者が誕生したとも言える。武田は「労働の果実を搾取し、あまつさへ、貧困に乗じて不当な日歩で利子を取り立てる華僑」と述べ、インドネシア人の代理人のように振る舞ひ、ジャワにおける批判である。これについては、次の記述を見ておこう。

右の「植民地的搾取や奴隷政策」という記述に関しては「大東亜共栄圏に於てはあり得ない言葉であると強調している。つまり、この記述は、インドネシア人が日本から独立する意志を抑制しようとする言説である。しかし、武田は「大東亜共栄圏」思想の継続を疑い、最終的にはその実現の困難とインドネシアの「独立なる形式」を予感したのである。その理由としては、武田がこれまでのインドネシアにおける経済政策のあり方に対する不満と批判、さらに、「アモク」のようなインドネシア人の燃えるような独立の願望を肌で感じていたことが挙げられよう。武田麟太郎は、インドネシア人の貧しさに共感し、「インドネシア人の生活は低すぎる、悲惨すぎる」とよく口にしていた。そのため、日本に全面的に向かいかねない武田の批判

あるが、植民地的搾取や奴隷政策を前提とし、それに対立する概念としては、この大東亜共栄圏に於ては、あり得ない言葉だからです。(中略)云ふまでもなく、大東亜共栄の大理想は、今後幾多の困難と時間を克服してのみ樹立されるのだが、そのために、独立なる形式も現実的には必要となつて来るのでせう。(傍線は引用者による)

テールは一貫しているように思われる。これは、インドネシアに派遣される前に武田がプロレタリア文学者として活躍していたことも、シヤワで社会主義的傾向を完全に捨てることを行なった後も、シヤワで治安維持法により転向をきなかつた。このことは、この『シヤワ更紗』に明確に示されている。武田麟太郎と同じ時期に徴用され、「白紙」を受けた高見順は、「きみ、これでええわ、『人民文庫』の連中も、つかまらんですむ」と武田に向かつて言った。この証言により、シヤワへの徴用は、プロレタリア文学者にとつては、一つの脱出の道であつたことがわかる。

高見順自身は、川村濤が指摘するように、オランダの植民地支配下の被搾取者であるインドネシア人の姿を見ようとしたが、しかし、『パリの犬』においては以前のインドネシア人に対する根深い民族的な偏見、差別感を解消できなかった。それに対して武田麟太郎は、インドネシア人を日本人の性格と同視することによつて、異国に対する愛着を持つた。武田は、昭和十九年二月に浅野晃の家を訪れ、インドネシアの独立のために政府を説得する計画を立てようとした。元シヤワの日本軍宣伝班長町田敬三も同じ証言をしている。『シヤワ更紗』においては、高見順の『蘭印の印象』や竹越興三郎の『南国記』など、先行文献の引用があつたにもかかわらず、武田麟太郎は以

だが、我々は誰でも、日本にゐる支那人に憎悪をいだいてゐないのは事実である。ましてや迫害も加へてゐない。そんな

うに記した。

田麟太郎は南京事変後間もなく「国を愛する」において次のよう表現している。しかし、これは日中戦争に起因する国民的感情の「支那」と深く関わっており、「支那」をシヤワの搾取者として間に成立していた。武田麟太郎におけるインドネシアの表象は、おけるインドネシア人認識は、他者としての華僑と西洋人との思いを喚起させたものは自然であつた。そうした中で、武田に日本との共通点が少ないインドネシアにおいて、武田の日本へ一性を本心で捉えていた可能性が高い。一方、外見的文化的に「蛮人」としてのインドネシアを否定する武田は、日本人との同

「大東亜共栄圏」への疑問と左翼的な経済批判が見られた。「野認識」と同一性の強調について論じてきた『シヤワ更紗』には、

以上、武田麟太郎における日本のオリエンタリズム的な他者

四 おわりに

は、他者としての「支那」に向かい、隠蔽した形で表現された

のたう。

好きてなかつた。それが自主的存在を意味する限りは結構で

もつとも、自分は独立と云ふ言葉の持つ古臭い匂ひはあまり

ルミン・パネへの手紙の中にもそれが現れている。

に使われている。最終部に挿入されたインドネシア文学者、ア

一方、『シヤワ更紗』においては、搾取と同義の言葉が頻繁

彼らの本質を認識しえずに終つたわけである。

ひ馴らされた家畜などと囁言を云つてゐた毛唐どもは、遂に

ア人の中を流れる血の激しさを見るべきであらう。うまく飼

ツク「現象と云ふ。(中略)ここに、表面穏かなインドネシ

積が爆発した時、人々は「タ・クラツア」あるひは「アモ

感情は燃えてゐるのである。その抑へられた執拗な感情の堆

(中略)彼らの顔は無表情にとどまつてゐけれども、内部の

びがたきもこともちと忍んで、顔色もかへない時もある。

まことに、礼儀正しく平静な彼らは、日本の武士のやうに忍

うな精神の象徴として解釈する。

として否定的に捉えているが、武田麟太郎は、武士の燃えるよ

ネシア人の「アモク」について、「熱帯性の突発的な精神錯乱」

前の偏見や先入観から離脱してきた。例えば、森三千代はインド

であり、商売などの経済的な活動における権力を重視している。シヨングスは下男のことです。日本の屋台店のやうな食べ物やの主人には使はれて火をおこしたり、皿を洗ったり、何かついたりします。主人は支那人ですが、見たところ貧しき⁽⁵⁾うなのに、これに使はれるシヨングスは一そうあはれです。武田麟太郎はこのよつなインドネシア人(原住民)の経済的弱さを目的あたりにすることによって、自分が好んだ「庶民性」を再発見した。そこからインドネシア人への同情が生まれ、それは『ジャワ更紗』の中で共鳴している。武田がインドネシアの人々に愛着と親しみを感じたことは明らかである。しかし、「大東亜共栄圏」という搾取的運動に参画してしたことには、武田麟太郎も痛みを感じた。戦時中のみならず、戦後になつても作品をあまり書けなかつたことはこのためであろう。このよつな矛盾を抱えた武田麟太郎の姿は、彼のイデオロギイ的挫折だけでなく、帝国主義的言説に巻き込まれた当時の文学者における戦争のディレンマも反映している。その表裏を巧みに表現したのが『ジャワ更紗』なのである。

武田麟太郎が「支那」を他者としての認識をするのは、人間の関係の面ではなく、ジャワにおける権力との関係からである。武田麟太郎は『東京朝日新聞』一九四二年六月十三日の「宣伝隊の見たジャバ島民」という記事において、次のようにインドネシア都市としては、ケジリ、マラン、スマラン、アグラランなどがあらゆる点からみて良かったが、何処へ行つても東印度を統治していたのはオランダ人ではなくして支那人だらうといふ感⁽¹²⁾じを強くした。

国籍のことで不⁽¹⁾断はすつかり忘れてつきあつてゐる。生活する民には、どの土地、どの人種なぞどの相違はいつも問題にならぬからである。すべて生活する隣人の愛情によつて結びつけられる。恐らくは、今度の事変が戦争になつてもさうにちがひない。まことに、永い間仲よくつきあひ、商売をしてゐた同志が二つに別れて、憎⁽¹³⁾しみあはねばならぬ位置に置かれると云ふことは何であらう。

右のようにシヨングスのイメージを馳⁽¹⁴⁾なき「職業」として描き、インドネシア人の心奥まで浸透したオランダ人の支配に注目している。それに対し、武田麟太郎は漫画の『ジャバのクチャン』で定義するように、シヨングスの支配者は「支那人」であつた。

問見られる。しかし、帝国主義的言説と文学のイデオロギイとの関係という観点から、「南方」を体験した旧左翼作家、武田麟太郎と高見順の文章を比較してみると、インドネシア人についての捉え方は異なつてゐる。高見順は太平洋戦争の直前の一九四一年、ジャワとバリなど旅行し、インドネシア人の印象について「和蘭治下のインドネシアの土民姿を思い浮かべてみるのに、一番強い鮮やかに来るのは、シヨングスとしての土民の姿である」と述べ、さらにシヨングスについて次のように描いてゐる。

- (1) 啓民文化指導所 (Pusat Kebudayaan) は日本軍政宣伝部の外局として一九四三年四月に成立した。主な目的と業務は、日本文化を紹介し、普及するとともに、インドネシア人芸術家を育成することであつた。倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』(草思社、一九九二年)、二六七頁。
- (2) 神谷忠孝「南方微用作家」、『北海道大学人文科学論集』二〇号、一九八四年。また、神谷忠孝・木村一信編『外地』日本語文学論『世界思想社、二〇〇七年)収録の「外地」日本語文学を扱うことの意味に、「武田はインドネシア独立を真に願つていた」(六一七頁)とある。さらに、及川敬一も「武田麟太郎—インドネシアの独立を夢見て」において同様の分析をしている。神谷忠孝・木村一信編『南方微用作家—戦争と文学』(世界思想社、一九九六年)、一四七頁。
- (3) 河西晃祐「微用作家北原武夫・浅野晃、武田麟太郎のインドネシア—戦時期『南方』観の一考察」、『紀尾井史学』二二号、二〇〇二年、三三頁。
- (4) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』(中央公論新社、二〇〇三年)、二〇頁。

注

- (5) 川村湊『南洋・権太の日本文学』(筑摩書房、一九九四年、六七頁。
 (6) 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』(世界思想社、二〇〇四年)および、後藤乾一『近代日本と東南アジア』(岩波書店、一九九七年)、一八二―一九二頁。
 (7) 木村一信編『南方徴用作家叢書13ジヤワ編』(龍溪書社、一九九六年)所載『なつかしい風物』、五十六頁。
 (8) 同右『ジヤバのフクチャヤ』、一三頁。
 (9) 同右『上陸半歳の所感』、三三頁。
 (10) 川村湊は『南洋・権太の日本文学』(筑摩書房、一九九四年)において、太平洋戦争拡大の時点で本来南方とはほとんど関係なかった文学者の中に武田麟太郎の名前をあげている。武田は派遣される直前に目的地は南方らしいと予想したが、派遣先がインドネシアであることは全く知らなかった。『評伝武田麟太郎』(河出書房新社、一九八二年)、三五―五頁。
 (11) 武田麟太郎『ジヤワ更紗』(筑摩書房、一九四四年)、三頁。
 (12) 同右、二五頁。
 (13) 木村一信編『南方徴用作家叢書13ジヤワ編』(龍溪書社、一九九六年)所載『妻への手紙』、三頁。
 (14) 武田麟太郎『ジヤワ更紗』(筑摩書房、一九四四年)、一頁。
 (15) 同右、二頁。
 (16) 同右、一〇頁。
 (17) 同右、一八一―二〇頁。
 (18) 木村一信は『昭和作家の〈南洋行〉』(世界思想社、二〇〇四年)、二九六頁で、この歌は武田麟太郎による創作である可能性が高いと述べている。
 (19) 大谷晃一『評伝武田麟太郎』(河出書房新社、一九八二年)、三四九頁。
 (20) エドワート・W・サイード『オリエンタリズム(下)』(平凡社、一九九三年)、一六一―七頁。
 (21) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』(中央公論新社、二〇〇三年)、三九頁。
 (22) 武田麟太郎『ジヤワ更紗』(筑摩書房、一九四四年)、一〇四―一〇五頁。
 (23) 同右、五頁。
 (24) 高見順『昭和文学盛衰史』(講談社、一九六五年)、三八〇頁。
 (25) 浅野晃『浪漫派変転』(高文堂出版社、一九八八年)、二四〇―二四二頁。
 (26) 町田啓二『戦う文化部隊』(現書房、一九六七年)、一七三―一七四頁。
 (27) 川村湊『南洋・権太の日本文学』(筑摩書房、一九九四年)、七八頁。
 (28) 同右、七八頁。
 (29) 武田麟太郎『ジヤワ更紗』(筑摩書房、一九四四年)、一八二―一九頁。
 (30) 同右、二二―二三頁。
 (31) 『宣伝隊の見たジヤバ島民』、『東京朝日新聞(夕刊)』、一九四二年六月十三日号、三頁。
 (32) 武田麟太郎『国を愛すること』、『世間はなし』(相模書房、一九三八年)、一六六頁。
 (33) 高見順『蘭印の印象』、『高見順全集一九巻』(勁草書房、一九七四年)、二二頁。
 (34) 同右、二頁。
 (35) 木村一信編『南方徴用作家叢書13ジヤワ編』(龍溪書社、一九九六年)所載『ジヤバのフクチャヤ』、一三頁。